

障子久美

無意識の意識が共感を呼ぶような自然体。
サラリとしている普遍的なブラック味がイイ。

取材・文/早川加奈子 協力/ビクター音楽産業株式会社



「ドラマ」それでも家を買いました」の主題歌「あの頃のように」で20・25歳の女性のハートをガッチリ捉えたミュージシャン障子久美。ブラック・ミュージック・テイストなサウンドとニューミュージックにも通じる叙情的歌詞世界を、サラリと歌い上げるシンガー・ソング・ライターである。4枚目のアルバム『ピコズ・イツ・ラヴ』で、くっく大人の女の恋心をソフトに切なく綴ったサウンド面での変化などを、彼女にインタビュー。

——和製ブラック・ミュージックと呼ばれることに對しては、
「今迄のアルバムを紹介する時に、私はブラックが好きだということ、自分の音楽が成り立っている、ある程度ブラック、とは言ってたんですけど、

音聴いて頂いたり、歌聴いて頂いたりして少しわかってきて頂いてるみたいなん、そろそろその冠をとってほしいかな、と思うんですけども。日本人がやっているのであるっきりブラック、になることはあり得なかつたりしますよね、そういうことで余り抵抗はないですね」

——そういったブラック系の音が好きだ、という背景とか、曲のタイトルとかからだけ判断すると、もっとソウルの濃いモノを想像しがちですけども、障子さんの歌って結構サラリとしますよね。
「多分声質のせいだと思っんですけどね。これでソウルフルな声の人がまるつきり同じ歌い方をしたらきつと「コテ」に聴こえると思うんです。幸か不幸か、声質がサラリとするとよく言われるんで、その辺でプラスマイナス0かな、と思います」

——その辺も含めて、今回のアルバムはかなり普遍性を感じますが。
「3枚目迄はブラックが好き、というつつ割とポップス寄りな実験的なことも組み込みつつやってたんですけどね。ブラックというには別のものだったり、イギリスやフランスはいいこともしてたんですけど、今回はそういう色んな神経を使うのを止めて、どっちかっていうと、本当のブラックの王道みたいな曲や70年代の最初の頃の音とか後は今風のものも織り混ぜながら大人の人が聴けるもの、ミディアムやスロー中心で、ポップ寄りなことは少し控えたものも一回この辺で作って

ようになつてのがあって、無理は今何もなく、自然に近い形で曲も詞も書きましたので、目新しいことはもしかしたらそんなにやらないかもしれないけども、それだけ普遍的に聴いてもらえるかなっていうのは逆にありますね」

——ドラマの主題歌を歌われてましたけど、その視聴者や障子さんのファンの年齢層と障子さん自身の年齢が近いことも、詞や曲への共感を得てる気がしますね。
「そうですね、余り詞を作り込んでるっていう意識が全くないんですよ。思ったこと感じたことを結構書きやっているので、シメシメっていうよりは私も結構普通の人になって逆に思ったりするんですけどね」



←「because it's love」障子久美/
2,630円(税別)/VICTOR

鈴木結女

男性側の視点から女性側の視点に変わっても、
人間⇄鈴木結女はいつも「自分の色」を彩る。

取材・文／早川加奈子 協力／αLSTATION、ヘル・インターナショナル
ヴァージン・ジャパン



←「出逢いのとき」鈴木結女/930
円(税込)/Virgin JAPAN/待望
の3rdアルバムは来年早々頃にリ
リース予定。

性別不明のハスキー・ヴォイスのシンガー、鈴木結女。その不思議な歌声だけではなく、彼女の書く歌詞世界もまた男性の視点で描かれた、微妙な心象描写が印象的なもの。何よりも彼女の曲はバラードにしろ、アップ・テンポのものにしろ小気味良い歯切れ感がある。ニュー・シングル、TVドラマ「明るい家庭のつくり方」のテーマ曲「出逢いのとき」では、これまでとは異なった新しい彼女の色が表わされていて、その魅力は増々深味を増したようだ。そんなこちらの観念も吹っ飛ばす程に、実際の彼女はやっぱりサッパリした女性だ。

——ニュー・シングル「出逢いのとき」では今迄と違ってしっとりとしたイメージになってますね。歌詞もこれ迄のアルバムでは一人称が男性の立場で書かれてたのが、女性の立場からに変わってますが、何か心境の変化でも？

「いや何もありませんよ(笑)。ただ単に学生を卒業しましたので、それが先ず大きな転機でしょう、ということ」

——今迄は女性の立場での一人称を使うことに抵抗があったとか。

「使おうと試みたことはありませんけど、恥かしかつたんでしょうかね。どうしても23年間生きてきて、女の子⇄鈴木結女や女子大生⇄鈴木結女と意識したことはなくていつも人間⇄鈴木結女でありたいというのがあって、それで学生時代でも、女の子としてよりも一個の物体じゃないですけど(笑)、人間⇄鈴木結女として思われてました。それもちょっと悲しいですけど」

ど(笑)。何か安心するようになって感じて男の子からは同志みたいに思われて、女の子からはお父さんに相談するようになりで相談されたり。そういう不思議な微妙な位置にいたし、それが別に嫌じゃなかったし。そういう立場を踏まえて出す曲には「君」や「僕」という言葉がいちばん自然だったし。でも喋ってる時はちゃんと「私」っていいんですけど」

——アルバムでは英語の歌詞と日本語の歌詞の曲のバランスがとて面白い相乗効果を醸し出しましたが、英語の歌詞を歌う場合に、いかにエモーショナルなところを伝えるか、という点での歌い方の工夫とかは？

「私は帰国子女ではないし、ネイティブでもありませんが、英語で歌うという意識を抜きにしても、英語は音楽的な言葉だなどいつも思ってたんです。だから、曲を作る時っていうのは必ず鼻歌英語で作るんですが、そうすると英語の方が本当は歌い易いんですよ。逆に日本語で歌う方が難しいです。リズムや音符にしてもそうですね。逃げたくないですけど、ユーミンさんみたいに歌詞に重きをおかれる方がいらつしやいますが、私の場合曲が総ていうか先ず「曲ありき」って感じなんです。曲とメッセージがひとつのデザインのように絡んで出るのが理想なんで、だからリズムに上手くハマ込むには英語の方がやり易いんですよ。それに日本語で歌うとなると俳優になったみたいに色々情感とか考えながら歌わなくちゃならないので難しくな

高野寛

いいものは人をハネ退けず、簡単で奥が深い。
これまでの集大成的新作は果実のようなもの。



■高野寛Live/7月24日(金)7:00PM~/大阪メルパルクホール/¥4,120円/キョードー大阪☎06・345・2500

突き抜けたポップ感とセンスの良さで評判の高野寛。90年と91年には、本人の唯一のアイドル的ミュージシャンであるトッド・ラングレンをプロデューサーに迎えたアルバムを発表。さて92年は?との期待に応えるべく、5枚目「thanks」はゲストに忍野清志郎、大貫妙子、高橋幸宏を迎えたセルフ・プロデュースによる新境地的作品だ。

——ここしばらくトッド・ラングレンのプロデュース作品が続いていますが、新作は久々のセルフ・プロデュースによるアルバムですね。

「先ず90の頃は全然プロデュースをわかってなかったということ、後はやっぱりセルフ・プロデュースっていうのは本当に難しいものだなというところを痛感していつもと倍働いた感じ

——最初にコンセプトを決めてスタジオに入るのじゃないですか。

「そうですね、いつも割と僕はそうなんですよ。その時々気分でききた曲を作ってるわけなんですけど、今迄はトッド・ラングレンの指示に従ってやってただけですから、それでも成り立ってたんですけど。車で行ったらね、今迄助手席とか後部席に乗ってた感覚だったのが、初めて自分で運転したっていう感じだったと思うんですね。地図もちゃんと見なきゃいけないかったし」

——でも出来上がった後に発生したコンセプトめいたものってありますよね。

「そうですね。今回で言えば象徴的な言葉なんですけど、鳥と花と果実。それはレコーディング自体の例えでもあるんですけどね。自分が蛇取り役になって航海に出る、どこかの島に向って何かを探しに行くんだけど最初はその場所もわからない。何を探しに行ったか、というところとそれはきっと果実のようなものなんですけど。そういう意味かというところ、花が咲いて生まれるものが果実です。今迄の結晶が果実なんですけど、そこからまた芽が出るっていう。だから今回のアルバムっていうのは今迄僕が4枚やってきたことの集大成でもあり、1曲1曲の方向が、これからやるつもりでいることの予告編みたいな感じになってるっていう意味があります。さっき言った3つの単語っていうのが、時々色々な曲の場所に出てくるっていう。意図したことじゃなく、自然にそうなるっていう感じなんです」



↑「thanks」高野寛/3,000円(税込)/東芝EMI

——歌詞は、入り易い感じですよ。それは意識して?

「イイものはね、やっぱり人をハネ退けちゃいけないんじゃないかと思ってるんです。わかり易いということは重要な条件のひとつだなと今思ってるんですよ。わかり易いってまらないうるか浅いとか、そういうことではないと思うので、曲にしても詞にしてもいかにわかり易くて尚かつ奥があるかというところに今凝ってますけど。簡単なものの方が奥深いんじゃないか、と」

——今考えてるユニットやプランは?

「近いうちに実現したいのはトミエ工(サトシ)君と組んでリミックスかプロデュースしてもらおうとか、かなりその辺を具体的に考えつつありますけど」